

SDGs と英語教育

—— 里子の手紙を和訳する活動を通して得られたもの ——

SDGs and English Education:

What We Gained through the Activity of Translating Foster Children's Letters

清 水 真紀子

Makiko Shimizu

抄 録

日本の英語教育への熱は相変わらず高いが、多くの場合はスピーキング力向上といった英語でのコミュニケーション能力をはじめとする技能習得や、英語読解力向上に焦点が当てられているのが実情である。もちろん英語力の向上は望ましい。しかし、昨今で注目されている国際語としての英語 (English as an International Language: EIL)⁽¹⁾ 習得の意義は単なる言語能力習得だけでなく、世界情勢に対し興味を抱き、他文化理解を深め、地球市民としての共通の問題、課題を解決する力を同時に育成することだと考える。この力を育む教育は Education for Sustainable Development : ESD と呼ばれており、現在では国を挙げて取り組んでいる SDGs を実現させるためには必要な教育である。本稿はアフリカの子どもたちが日本の里親⁽²⁾宛てに英語で書いた手紙を日本語に訳して届けるというボランティア活動を通して、学生の意識に変化が出るのか、SDGs への理解を深めることができるのか、結果 ESD としての効果が見られるのかを検証し、英語の学習目的を再確認することを目的とする。

〔キーワード：国際語としての英語 (EIL)、ESD、英語教育、SDGs、翻訳活動〕

1. はじめに

1 (1). 英語を学習する目的とは何か

『『なんで英語やるの?』と聞かれたら、あなた何と答えますか?』鳥飼 (2011 : p.5) の『国際共通語としての英語』はこのような文言で始まる。『なんで英語やるの?』⁽³⁾とは本のタイトルで、この本が出版された1974年では、この質問を突きつけられ、返答に困った日本人は多かったようだ。当時は高度成長期でなんとなく英語を勉強すると将来役に立つと考えて英語を学習する人が多く、理由や目的を明確にできない学習者が多く存在したと述べられている。それから50年近くが経過した現在では、この質問には多くの日本人が「グローバル社会に必要だから」と答えるであろう。

実際に企業が従業員に英語力の指針となる TOEIC[®] L&R テストの高スコアを求める傾向が続いている。文部科学省 (2002) が「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想を策定し、「経済・社会等のグローバル化が進展する中、子ども達が21世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている『英語』のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であり、このことは、子ども達の将来のためにも、我が国の一層の発展のためにも非常に重要な課題となっている」と述べ、行動計画を出したのは2003年のことだ。それから学習指導要領が繰り返し改定され現在に至るまで、学校の英語教育は「英語が使える日本人」を育成するために、英語でのコミュニケーション能力習得、あるいは向上を主な目的としたものとなっている。2021年

度より実施されている新英語指導要領により、小学校においては英語は教科として扱われるようになった。また中学校では「授業を英語で行うことを基本とする」という方針が示されている。高校で要求されるのは中学までに培われた英語力を基に外国人講師を交えたディスカッションなどであり、より発展的で高度な英語力を必要とする授業を目指すように指導されている。しかし一方で、高い英語運用能力習得ばかりに焦点を当てることに警鐘を鳴らしている専門家も少なくない。年々難化していく学校英語教育の前に、なぜ英語を学ぶ必要があるのかという問いに対して考えさせる機会を設けていないからである。英語は日本社会において本当に必要になってきているのであろうか？成毛（2011）は自著で実社会で英語を必要としている人の割合は1割だと述べた。成毛の本が出版されてから10年が経過し、着実に日本でもグローバル化は進んでいるはずだが、現実には社会で生活していく上で英語を使わなくても支障はないように見える。『英語教育』⁽⁴⁾が「なぜ英語を学ぶの？にどう答えますか？」というタイトルで特集を組んだ際、仁科（2018）が「大学で英語を学ぶ必要はあるのか」という寄稿の中で引用した日本版総合的社会調査（2002）のデータでは、成人全体で「英語を仕事で使用した人」は12.4%、就労者の場合をもってしてもわずか18.6%だという。同じ日本版総合的社会調査（2002, 2003, 2008, 2010）のデータを分析し、「日本人と英語」にまつわる言説を検証した寺沢（2015：p.175）によると、日本における仕事での英語の必要性は近年においても限定的であり、客観的な必要性は主観レベルでの必要感・有用感を下回っていると結論づけた。特に英語使用者数（首都圏の20歳から59歳の就労者）は2002年から2008年の間で変化は見えず、2010年に減少をしているとも指摘している。ここで使用されたデータは最新のものではないが、この調査が行われた時期と比べて、実社会での英語必要度が上がっているとも思えない。文部科学省が述べた「英語でのコミュニケーション能力習得が子ども達の将来のためにも、我が国の一層の発展のためにも非常に重要な課題」であるならば、具体的にどのように日本の発展に関わってくるのかを考えさせる機会を与えるべきであろう。「英語は何のために学ぶのか」「英語教育はどうあるべきか」これらの質問に答えるのも本研究の目的となっている。

1 (2). SDGs と ESD

昨今では一般的になったSDGsは2015年9月25日に、国連持続可能な開発サミットで国連加盟国193国代表により全会一致で採択された「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」のことで、社会、経済、環境の3つのバランスを重視し、持続可能な社会前向きに作っていくための世界共通の目標である。「地球上の誰一人として取り残さない」を理念とし、貧困、紛争、気候変動、感染症などを世界が直面する共通の問題として捉え、人類がこの地球で暮らし続けるために2030年までに達成すべき17の目標と169のターゲットより構成されており、色分けされた17つの目標を輪にしたシンボルは目にしない日は無いほど、よく知られているものとなった。

ここで掲げられている持続可能な社会を実現するためにはその社会の担い手が必要であり、その担い手を育成すべく教育からもアプローチをかける動きが加速している。文部科学省（2019）は「SDGs実現に向けた文部科学省の取組」のなかでSDGs達成に貢献すると題し、持続可能な開発のための教育、Education for Sustainable Development：ESD（以下ESD）の重要性に触れ、以下のように定義付け、推進をしている。

- *持続可能な社会づくりの担い手を育むため、現代社会における地球規模の諸課題を自らに関わる問題として主体的に捉え、その解決に向け自分で考え、行動する力を身につけるとともに、新たな価値観や行動等の変容をもたらすための教育。
- *国際理解、環境、文化多様性、人権、平和等の個別分野を持続可能な開発の観点から統合した分野横断的な教育。

同省（2016）によるとESDは2002年に「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で日本が提唱した考え方で、同年の第57回国連総会で採択された国際枠組み「国連持続可能な開発のための教育の10年」（2005-2014年）や、2013年の第37回ユネスコ総会で採択された「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」（2015-2019年）に基づき、ユネスコを主導機関として国際的に取り組まれてきた。先述のSDGsの目標4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット4.7に位置づけ

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



図1 SDGs ポスター 国際連合広報センター (2018)



図2 ESDの基本的な考え方とSDGsでの位置づけ (文部科学省 2019)

られるとともに、その17の目標の実現に寄与すると国連総会でも確認されている。なお、文部科学省は2017年には学習指導要領においても、前文と総則に「持続可能な社会の創り手」育成を掲げている。環境問題や地球温暖化による自然災害、それによって引き起こされる貧困や飢餓、紛争、また伝染病の蔓延など現代社会が抱える課題は各自治体や国単位では解決が難しく、世界自体が持続不可能となりつつある。その流れを変えるためには、地球規模の課題を自分ごととして捉え、解決するために何が必要かを考え、自らが行動を起こし、変化を起こせる人材が必要不可欠である。

そして、この世界各国が直面している地球規模の課題解決のためには相互理解やコミュニケーションは必須であり、共通の言語、つまり国際語としての英語 (EIL) 習得が今後ますます必要になってくると著者は考える。

1 (3). ESD×EIL

Jay Walker (2009) はTED Talks⁶⁾の“*The World’s English Mania*”というスピーチの中で、現在の世界の異常とも受け取れる非英語母語者たちの英語熱に触れ、英語が世界共通語となっているのは世界が必要としているからだと述べ“*But with English, you can become*

part of a wider conversation – a global conversation about global problems, like climate change or poverty, or hunger or disease. “「英語を用いればより広い会話、世界の諸問題、気候変動や、貧困、飢餓、疾病などの問題について取り扱う世界規模の会話に参加できるのだ。(筆者訳)」と国際共通語を習得するのは経済的なメリットだけではないと語り、さらに“English represents hope for a better future where the world has a common language to solve its common problems.”

「英語は共通の問題を解決するための共通言語を持つ世界というより良い未来の向けての希望である。(筆者訳)」と締めくくっている。ここからも国際語としての英語 (EIL) を学習する際には、目標言語そのものの習得のみではなく、習得した英語運用能力をいかに社会に役立てていくかを考えさせていくことが今後の英語教育の要になってくることがわかる。CLIL⁽⁶⁾の枠組みの中でSDGsと英語教育の融合を検討している伊東 (2019) は今までの英語教育は言語の知識習得や運用に重きが置かれてきたと指摘し、今後は目標言語の英語で教科内容やトピックを深く考察し、課題解決につながる新しい英語教育のかたちを提唱している。本研究では、CLILの枠組みでは行わない。代わりに貧困にあえぐ発展途上国の子どもたちと、その子どもたちに関わる教育関係者による日本の里親宛ての英語の手紙を、日本語に翻訳して届けるというボランティア活動を通して、学生の意識に変化が芽生えるのか、SDGsに対する理解は深まるのかを検証していくことを目的とする。英語を日本語に訳す行為は、文法訳読法と言われ、学校での英語の授業では文法規則の理解や語彙の解釈を確認するために行われる。つまり英語運用能力向上を目的として行われることが多い。しかし、翻訳の対象となる手紙の内容を、単なる訳すための英文テキストと捉えるのではなく、その手紙が書かれた背景、及び手紙の書き手の所属する社会状況を学び、この翻訳活動の真の目的を理解することで、SDGsの意義重要性を深く理解し、行動に変容を起こすことができるようになるのではないかと考える。これこそがSDGsを実現させるために行うべき教育、ESDと呼べるのではないだろうか。西井他 (2012: p.10) はESDの目的は持続可能な社会づくりであるので、一番の評価指数は当該地域でどれくらい持続可能な社会にむけて変化したか、また社会全体の変容もさることながら、一人ひとりの変容も求めているため

学習者に対する評価指数も必要だと述べ、評価の視点を示している⁽⁷⁾。その中の一つに「自分の問題として捉えているか。主体性があるか」という項目がある。今回は学生は翻訳活動を通して、貧困問題を自分ごととして捉え、また主体的に行動する、あるいは行動につながられるのかをみていく。

2. 授業の概要

2 (1). 対象学生

対象学生は英語ゼミの社会力育成ゼミに所属する短期大学1年生である。2020年、2021年と実施して、今期で3年目となる。学生数は以下の通りである (表1)。

表1 年別の履修者数

2020		2021		2022	
男	女	男	女	男	女
5	11	2	8	1	14
計 16		計 10		計 15	

2 (2). 授業内容

授業は1コマ90分、15週からなる。社会力育成ゼミIという性質上、社会力を育成することが授業の目的である。前期の日本語リテラシーゼミ内で前述のJay Walker (2009) 氏のTED Talk “The World’s English Mania” は視聴済みであるので、国際語としての英語理解については導入が済んでいる状態になっている。

「社会力育成ゼミI」は短期大学部1年生が受講する必修の授業で、2022年度高崎商科大学短期大学部の学生便覧に書かれたカリキュラムマップではこの授業を通して身につけるべき学力の三要素では主体性・多様性・協調性となっている。その中の一つの主体性とは「他から影響されることなく、自分の意志や判断によって行動しようとする性質・態度」であり、先に述べたESDの「持続可能な社会づくりの担い手を育てるため、現代社会における地球規模の諸課題を自らに関わる問題として主体的に捉え、その解決に向け自分で考え、行動する力を身につけるとともに、新たな価値観や行動等の変容をもたらすための教育」に重なる。また翻訳を通して接するのはエチオピアの子どもたちとその関係者であり、普通の大学生活を日本で送っているだけでは交わることが難しいと考えられるのう

授業のねらい (概要)	このクラスではゼミナール形式の授業により、国際共通語としての英語を理解し、グローバル市民としての意識を学び、現在求められている英語の意義の理解を深めることを目的としています。また実際の翻訳活動を通じ、英語を使う事により自覚を促します。またテーマを見つけ、調査し、発表できる力、及び、要点を文書にまとめる力を付ける事で、社会人基礎力の土台を築く事を目指します。
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション コースの進め方、教科書の使い方の説明 毎回の課題の説明 スケジュール、注意点、成績評価について 予習 (時間) : 質問等をまとめておく。(30) 復習 (時間) : コースの進め方、スケジュール、注意点、成績評価、課題について確認する。(30)</p> <p>第2回 社会の課題を考える① 外部講師のお話 国際語としての英語の役割を確認するため外部講師の話をお聞かせます。 予習 (時間) : 外部講師のプロフィール、活動内容を読み、質問をまとめておく。(30) 復習 (時間) : 話を聞き感じたことをまとめ、リアクションペーパーに書く。(30)</p> <p>第3回 社会の課題を考える② 国際共通語としての英語を理解する 教科書 (p5-73) を読み、国際共通語としての英語とはどのようなものなのかを理解する 予習 (時間) : 教科書を読み、質問に対する意見をまとめておく。(30) 復習 (時間) : 国際共通語としての英語に対する考察をまとめ、リアクションペーパーに書く。(30)</p> <p>第4回 翻訳実践① 課題となる担当の翻訳活動をする。 予習 (時間) : 与えられた英文を訳しておく。(30) 復習 (時間) : 教員のフィードバックを見て、自分の翻訳を修正する。(30)</p> <p>第5回 翻訳実践② 第4回の翻訳実践活動の仕上げをする。 予習 (時間) : 翻訳されたものを提出できる状態にする。(30) 復習 (時間) : 実際に翻訳をして学んだことをまとめておく。(30)</p>

図3 社会力育成ゼミ1 シラバスの一部

一つの学力「多様性の理解」につながると考える。

学生が翻訳活動を行う手紙をご提供いただいたのは ESNAC という NGO 団体である。⁶⁾ まず、社会の課題を考えると、授業ではこの団体の創立者の藤田氏に団体を立ち上げた経緯、現地からの報告をまとめた内容を伺った。貧困について学ぶためだ。

その次に先述した『国際共通語としての英語』を読み、国際語としての英語 (以下 (EIL) とする) を理解してもらった。鳥飼 (2011 : p.12) は EIL を使うのは英語力のみならず、母語の力、言葉への感性、文脈を読み取る力、相手への共感力などを全て総動員し、主体的に相手と関わる一これこそが今後の英語学習が目指すべきコミュニケーション能力だと述べている。また EIL 習得を目標に設定することにより、学習者が英語学習の目的を再考し、自律的に学ぶ姿勢を可能にするとも述べており、EIL 習得を目標にして英語学習を続けることは、先に述べた ESD の「主体的に行動を起こすことができる人材教育」の理念とも一致する。英語学習者が何のために英語を学ぶのか、目的意識をしっかり持ちながら英語を習得することの大切さを理解した後、翻訳ボランティア活動へ繋げていく。この活動として多くの位置を占めるのが英語から日本語への翻訳という作業であるが、翻訳は非常に複雑且つ困難な作業であるので、翻訳について学ぶ時間を設けた。

3. 翻訳ボランティア活動

3 (1). 翻訳とは何か

翻訳は従来英語の授業で行われている単なる英文和訳とは異なる。大学英語教育における翻訳指導を研究している辰巳 (2015 : p.69) は両者の違いを分かりやすく表にしている (表2)。

表2 辰巳 (2015) による 翻訳と英文和訳の定義

	翻訳 (意訳 ⁹⁾)	英文和訳 (訳読 ¹⁰ 、直訳 ¹¹⁾)
特徴	文脈を考えて訳を産出する。	文脈を考えずに語や句を訳す (translating)。教室内の外国語指導、学習者による L2 ¹²⁾ 習得の手段である。
訳す目的	原文の語句や文構造を的確に理解した上で、目的言語を使って第三者に分かりやすく伝えること。	辞書の訳語を当てはめ、機械的変換を行い書記化したもので、訳文の質は問われない。
コミュニケーションにおける仲介の有無	起点テキストの著者と翻訳読者とのコミュニケーションの仲介を担う。	コミュニケーションという視点はない。

出典 : 辰巳 (2015) 翻訳と英文和訳の定義

この表からもわかるように和文英訳と翻訳は似て異なるものである。今回の授業内での和訳作業を翻訳と定義するのは、文脈を理解することに重きを置いているからである。これは書き手の里子の環境から知る必要がある。また目的は里親へ里子が書いた手紙を分かりやすく伝えることであり、そのため、学生は手紙の書き手と読み手の里親のコミュニケーションの仲介を担うつまり、手紙の書き手の気持ちを読み手に正確に伝えるという重大な役目を追うことになる。翻訳言語

学者のヤーコブソン(1959 : p.127)は、翻訳は(1) 言語内翻訳(intralingual translation)、(2) 言語間翻訳(interlingual translation)、(3) 記号法間翻訳(intersemiotic translation)の3つに分けられるとしている。(1)は同じ言語内で表現を言い換えることや文章を要約することを指す。(2)は一つの言語から他の言語への置き換えであり翻訳という、この行為をイメージする人は少なくないであろう。(3)は言語で表現されたものを非言語の表現(音楽、映画、絵画)に変換することとしている。このように翻訳の概念は広い。

平子(1999 : p.29)は翻訳を「起点言語テキストを意味等価的な目標言語でテキスト化し伝達すること。あるいはテキスト間での意味の等価的伝達」と定義している。つまり原文の内容を正しく読み取り、原文の意図していることを変えることなく別の言語に言い換えて文章にすることである。翻訳とはその知識を総動員し、注意深く行う必要がある。なぜならば、翻訳者の「起点言語の解釈」が、翻訳者による「目標言語での表現」を介して読み手に伝達されるからである。平子はこれを「翻訳は読み手を支配する」と表現している(p.7)。このように翻訳は大きな責任を伴う作業であり、翻訳者はその責任十分に自覚して行う必要がある。言語はその言語が持つ文化的背景に強く影響されるため、原文の意味をそのまま訳すと読み手に不快な思いをさせてしまうことも起こりうる。そこで最も適切な表現を探すプロセスが非常に大切になる。広田(2007 : p.2)はこのプロセスを原文の内容と目標言語で言い換えられた表現が等しくなるように翻訳者が試行錯誤をして工夫を重ねるプロセスと定義している。翻訳をする場合、大きく分けて2つの段階を踏む必要がある。まずは原文の内容を正しく理解すること。そのためには文法と単語の知識が必要である。第1段階は文法の知識により、英文構成を正しく読み解く。また英単語は日本語と違い、一つの単語が複数の意味を持つ場合が多いので、辞書をひきながらどの意味がその文脈で最も適切なのかをチェックする段階である。第2段階は目標言語テキストで表現段階。ただし、目標言語の文化、習慣、慣習などを考慮し、読み手に原文テキストの意図が誤りなく伝わるように適切な表現を注意深く選ぶ。ここが一番重要である。英語では全く同じ表現であっても日本語にした場合、発信者と受信者の関係性が非常に色濃く反映されるからだ。今回は学生にとって初めての翻訳を伴う学習のため、二つ

の段階を付け足した。第3段階として、ペアで相手の翻訳をチェックし、文法的な誤解釈はないか、適切な表現が使われているかを相互チェックし、フィードバックを与え合う段階、最終段階として教員へ提出、教員のフィードバックを受け、加筆、修正をする段階である。この4つの段階を経てやっと翻訳した手紙が里親の元へ届くようにした。

3 (2). 翻訳活動実践報告

3 (2)①. SDGs とその背景の理解

まずSDGsの理解の確認から始めた。SDGsを初めて聞いたという学生は皆無であったが、言葉だけで内容を深く理解していない学生も散見された。そこでSDGsが生まれた背景と内容について説明した。特に今回の翻訳活動では貧困の理解が必要になるため、ゴール1の「貧困をなくそう」を取り上げ、世界の貧困の状況を理解させた。

3 (2)②. 原文テキストの生まれた背景と文脈の理解

次に原文テキストが書かれた背景を理解するため、ESNAC代表の藤田氏に団体を立ち上げた経緯と活動内容などを講演していただいた。ご高齢ということもあり、2年目からは1年目の講義で使用したzoomでのリモート講演を録画したものを視聴させた⁽¹³⁾。ここで原文のテキストがどのような状況で書かれたものなのかを理解した。その後、翻訳と英文和訳の違いを説明した。上記の辰巳(2015)の表を使って説明し違いを確認するために訳をつけてもらった。ここでは“‘There’re some cookies in the box.’”という同じ英文を二つの異なる状況で訳文がどのように変わるかを経験してもらった。視覚的に分かりやすく違いを理解させるためにイラストを用いた(図5)。翻訳エクササイズで用意したのは2つの違う状況である。

状況①はリモートワーク中に話しかけられて困る母親が子供の気を逸らすために上記の英文を話している場面。状況②は授業中に英語教員が同英文を訳して生徒に伝えている場面である。前述の辰巳(2015)によると翻訳の特徴は「文脈を考えて訳を産出する」とある。①では話し手は母親で聞き手はその子供である。母親が子供にどのような言葉を使うのか文脈を考えて訳を産出させた。②では英語教員が英語の授業に例文の意味を言っているので文脈を考慮に入れる必要はない。よって通常の英文和訳で良い。

①では多くの学生は「あの箱の中にクッキーが入っているよ。」あるいは「あの箱にクッキーが入っているわよ」と訳し、②は「あの箱の中にクッキーが入っています。」と訳した。二つの文は語尾が違うだけだが、受け取る印象はまるで違う。またなぜそのように訳したのか訊いたところ、①については「母親が自分の子供に話しているので、「です」「ます」は使わない」、「母親から子供への発言なので」と回答があった。②に関しては「通常の授業で教員が生徒に訳を言っているので、丁寧語を使うのが適切だと思う」と全員の意見が一致していた。このように文脈によって、また話し手と聞き手の関係によって、あるいは話し手の性別によって語尾や使う表現が違ってくることが日本語の特徴だと説明した。



図5 授業で使用したパワーポイントスライド1

状況、話し手と聞き手の関係にかかわらず常に‘I’であるが、日本語の場合は話し手の年齢、性別、また聞き手との関係や場によって、多数存在する「私」を意味する選択肢の中から最も適切なものを選ぶ必要がある。⁽¹⁴⁾ このように人称代名詞に対する言葉選びも翻訳では重要な要素を占めることとなる。この日本語の複雑さ、主語の役割の相違を理解させるために用意したのが以下(図6)に示すスライドである。

①②ともに英文は“ I'm Taro Kikuchi.”であるが、①は話し手が子ども、そして男子であることから人称代名詞の言葉を選ぶ必要が出てくる。また絵を見ただけでは聞き手がわからない。そこで文脈を読み取るエクササイズとして、①-1場面設定として新学期の自己紹介をしているとし、①-2は初めて会った同じクラスの男の子に話しかけているとした。②は取引先の人と始めてあった時の自己紹介をしているとした。



図6 授業で使用したパワーポイントスライド2

3 (2) ③. 日英の人称代名詞と主語の役割の違い

翻訳において文脈を読み取ることは最も大切なことであるが、英語と日本語における主語の役割の違いへの理解も必要である。英文は基本的に主語と述語動詞から構成される。また述語動詞によって補語や目的語を伴う。特に他動詞と呼ばれる動詞は目的語を伴わなければ英文として成り立たない。しかし日本語では多くの場合、主語や目的語は省略される傾向にある。これはコミュニケーション時に言葉以外の意味に重きを置くハイコンテキスト文化⁽¹⁴⁾に属する日本語の特徴であり、話し手の意図は多くの場合、聞き手はすでに背景や関係を理解しているはずだとの前提のもと、聞き手に委ねられる。この部分も言葉の意味に重きを置くローコンテキストな文化圏で話されている英語との大きな違いである。よって日本語として訳出する場合、主語を訳さないことも考えなくては行けない。さらに、人称代名詞は英語の場合は主格であれば性別、

①-1は「僕はきくちたろうです」「きくちたろうです」と敬語を用いる訳が多く見られ、語尾は丁寧語を全員使用した。①-2は「僕、きくちたろう」、「きくちたろうだよ」となり、語尾は丁寧語を用いた例はなかった。②に関しては全員の学生が「私はきくちたろうと申します」と訳した。ビジネスシーンであるので、人称代名詞は「私」を使うべきだというのが学生の意見であった。また「申す」という謙譲語を使用していた。このように文脈によって異なった人称代名詞の使用や、また敬体表現の有無など、日本語での訳産出において文脈から慎重に数多くある選択肢の中から最も適切な言葉を選ぶ必要があることをを学ばせた。

3 (3). 翻訳課題の内容

翻訳作業での注意点の説明の後には各自、手紙と子どものケースヒストリーと呼ばれる生い立ち、現在の状

況が記されたレポートの翻訳に取り組んでもらった。学んだ英語と日本語の言語的な差異や文脈理解の重要性、また手紙の書き手の背景の知識など、翻訳に影響を及ぼす事項を踏まえながら、里親という読み手に書き手の気持ちを正確に伝えることを目的として訳し、提出する。翻訳対象物は①里子の手紙②里子の世話係からの手紙（2022年度はケースヒストリー）である。課題の構成は①翻訳文②訳した際苦労したこと③語彙や英文法など新たに学んだこと④訳した後の感想の提出となっている。

3 (4). 学生のコメントからの考察

①里子の手紙の例と（付録1）と翻訳されて里親の元に届けられた手紙の一例（付録2）は付録にてご覧いただきたい。②の訳した際苦労した点として「手書きの文字を判読するのが難しかった」、「ネイティブが書いた文ではないので間違いがあり、推測するのが大変だった」という声もあったが、多くは「今までやったことのある和訳と違って、手紙の書き手の気持ちをどのように表現したら自然に伝わるのか何度も何度も読んで原文を理解し、適切な表現を探した」とある。このように学生は不自然な訳を避けるためにかなりの時間を割き、課題に取り組んだようだ。今回は里親に子どもの気持ちを伝えるために責任を持って翻訳作業に取り組み、苦労しながら自然な日本語に訳出したことが伺える。③では宗教関係の表現、貧困に関連する英単語に初めて触れたとの声が多かった。また接続詞の使い方を学んだとの声も聞かれた。④の訳した後の感想では

実際訳してみて初めて感じたのは、悲しさです。最初はわかりませんでしたが、訳していくと、ご両親の状況を知り、とても辛い気持ちになりました。絶対に辛いはずなのに、手書きの手紙では元気な文章と絵も描いてあり、明るいお手紙を書いてくれました。また、助けが欲しいのはこの男の子のほうなのに、こちら側のことを祈ってくれている優しさが嬉しくなりました。世界には、わたしたちが想像したことのない助けを求めている方々がたくさんいるなど感じ、少しでも翻訳でちからになれたらと思うことができました。以前だったら翻訳のことも知る事がなかったのですが、この機会を経験できてよかったです。

翻訳作業が無ければ、私は貧しい国の子供たちや人々が、実際にその国でどのように生活していて、何に苦しんでいるかの現状を理解することが出来なかったと思います。今回、この授業を通して、世界では貧困が問題になっていることが分かりました。このことを知ったことで、自分に出来ることがあるかと言われれば難しいことだけど、理解して意識して行動するだけでも違うと思いました。少なからず、私自身にもできることはあると思うので、日々の生活の中で、意識していきたいと思います。

この他にも「貧困の実情が少し分かった。世界で困っている人のために、自分が出来ることをやってみよう」と強く思った」など、問題解決のために積極的に行動していきたいと述べる学生がほとんどであった。しかし中には、取り上げた貧困やその他の社会的な課題に関心を寄せず、ただ課題の一部としてのみ取り扱っているように見えた学生も当然ながら存在した。しかし翻訳活動後に次のような感想を書いていた。

短期大学の一年次に、エチオピアの子ども達から日本の里親に宛てた手紙の翻訳に取り組みました。当初は、ゼミで課された課題をクリアするために翻訳作業に向き合っているだけでした。しかし、実際に手紙を読みながら翻訳を進めていくうちに、子ども達からの感謝の言葉に触れ、温かい気持ちになることも多くありました。また、「どのように表現すれば上手く伝えられるか」ということを考えることも多かったため、生きた語学を勉強するとてもよい機会となりました。この経験で学んだことは、語学を学ぶことは目的ではなく、手段であるということです。これからも、学んだ語学をどのように活かしていくか、ということを考えながら、様々な活動に挑戦していくつもりです。

このコメントから、学生は英語運用能力向上のみを目的とするのではなく、その能力をいかに社会に還元していくのか、英語ゼミが目的としている英語学習の本来の目的を、この活動を通じて理解してくれたことがわかる。また今年度卒業した学生が大学時代最も力を入れたこととして以下のように記していた。

短期大学一年次に、エチオピアの子ども達から日

本の里親に宛てた手紙の翻訳に取り組みました。私がこの活動に力を入れた理由は、支援者の方のお話を伺った際に、子ども達の貧困の状況に衝撃を受け、何としても子ども達の想いを伝えなければならない、と強く思ったからです。翻訳の際には、子ども達の文章を丁寧に読み取るようにしました。そして、そこに表現された感謝の想いを伝えるため、読み手である里親の立場に立って、理解し易い表現で翻訳することを心掛けました。この活動は、手紙一枚を翻訳する、という地道なものでしたが、翻訳の難しさに触れ、それを成し遂げたことで大きな自信を得ることができました。そして何より、私自信の将来の選択肢を広げられた貴重な体験となりました。

紹介した学生のコメントから見えてくるのは、この翻訳ボランティア活動を通して、世界で起きている貧困を知り、その問題を自分ごととして捉え、問題解決のために自分がなすべきことを主体的に行動に移していこうと考えられる、まさにESD目指す持続可能な社会の担い手になり得る人物像である。

4. おわりに

本稿の目的は発展途上国の子どもの手紙を翻訳して日本の里親に届けるというボランティア活動を通して、学生の意識に変化が見られるのか、SDGsに対する理解が深まるのかを検証することであった。また国際語としての英語習得の意義の確認も検証目的であった。今回取り上げた貧困はSDGsの数あるゴールの一つにすぎない。ただこの活動をきっかけに他の目標へ目を向けた学生も多い。翻訳後に取ったアンケートの結果、また学生が選んだ卒業論文のテーマから見ると、学生の意識には変化が見られたと考えられる。多くの学生が自分のできることから始めて、貧困を終わらせるために支援をしていきたい。支援について調べていきたい。積極的に支援に参加したいといったコメントを書いてくれていた。これこそESDの“Think globally, act locally”「地球規模で考え、小さいことから始めよう（著者訳）」が目指す理念と合致し、持続可能な社会の担い手としての資質が備わっていると言えよう。

この翻訳ボランティア活動は非常に地味で全く目立たない活動である。だが、「実際に書かれた手紙を読

み、里親のために責任を持って日本語にして届ける」という活動は学生を成長させたと思っている。これは里子の手紙という素材に負うところが大きい。大学における翻訳教育を研究している染谷（2010）は、翻訳や通訳はコミュニケーション行為そのものであるから、現代社会において重要な「異文化コミュニケーション」に関わる諸問題を鮮明にかつ多角的に体験できる格好のエクササイズだと述べている。このことから翻訳素材を吟味した翻訳作業を英語教育に取り入れることは理に適っていると考えられる。そして冒頭で挙げた「なぜ英語を学ぶのか？」という問いに対して、「自国だけでなく世界の問題について幅広く知ることができたり、多様な文化の人たちと交流することができて異文化理解につながったり、世界の問題について色んなアイデアを出しながらお互い協力して解決に向かうことができるものなので、国際共通語として英語を学ぶことは、世界の平和に繋がるものだと思います」と、英語習得の意義を代弁してくれた学生もいた。SDGs時代を生きていくには、地球の問題を共に解決する共通語として、英語の習得は今後必要性を増していくと思われる。これからの英語教育は人材育成にも寄与すべきであると考えられる。

註

- (1) English as an International Language は Larry Smith (1983) によって提唱された考え方で、多国籍社会における英語の使用目的の多様化と英語非母語話者数増加に注目し、英語は国際コミュニケーション手段であると論じた。国際共通語としての英語 (English as a Lingua Franca) と同義語として使われていることが多い。
- (2) 本来であれば里親とは事情があって親元で暮らせない子どもを引き取って養育する親のことであるが、ここではアフリカの子どもたちの教育費を支援する教育里親を里親と呼ぶ。
- (3) 1974年に午夢館から出版された書籍で著者は中津煉子。ベストセラーとなり中津は大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。
- (4) 1952年に創刊された大修館書店による月刊専門誌。英語教育に携わる教育者や関係者向けの最新情報を提供し、議論の場も設けている。書評や連載など著名人からの寄稿も多い。
- (5) 「TED (Technology Entertainment Design の略称)」は、ニューヨークに本部を置く、様々な分野の専門家による講演会を主催しているNPO団体。「Ideas worth spreading (広める価値のあるアイデア)」をミッションとして掲げ、インターネット上でさまざまな分野の専門家によるTED Talks と呼ばれるTED主催の講演を無料で視聴できる動画配信サービスの提供を行なっている。英語でのプレゼンテーションは英語学習者にも生きた教材として人気がある。
- (6) Content and Language Integrated Learning の略称。教科科目やテーマの内容 (content) の学習と外国語 (language) の学習を組み合わせた学習 (指導) の総称で「内容言語統合型学

習」とも呼ばれ、主に英語を通して、何かのテーマや教科科目を学ぶ学習形態である。

- (7) 西井他 (2012 : p.10) ESD における学習者に対する評価の視点例は全部で 9 つ挙げられている。
- (8) ESNAC とは Educational Sponsorship of Needy Asian & African Children の略である。代表の藤田文子氏が1979年に設立した団体で、インド・バングラディッシュ・エチオピアを中心に、貧しく教育を受けられない数多くの子どもたちに教育を受けさせることを活動の目的としている。主な活動内容は里子の教育費支援だが、賛同者から寄せられた寄付金で学校、職業訓練校や医院などを設立し、里子をめぐるコミュニティの支援を全体的に行っている。里親になるとコーディネートされた里子を紹介され、年間30,000円の里子の学費を支援する。年に4回、活動の内容を知らせるニュースレターが届き、クリスマス時期になると里子と関係者から近況を知らせる手紙が届く。その手紙は翻訳サービスを希望すると、翻訳された状態で事務局を通して送られてくる。英語ゼミの学生が担当したのがこの手紙である。この藤田氏には団体を作った経緯、現在の里子の状況などを講演いただいている。
- * (9) (10) (11) に関しては引用した表に註がついていたもので以下その註を引用する (辰巳、2015 : p.79-80)
- (9) 英語教育において、学習者が ST を解釈し、読み手にわかるように翻訳することで ときには意識とも言われる (柳瀬、2011)。
- (10) 教師の指導中心で、原文の語句や文構造を正確に理解させながら外国語を教えることを目的とし、訳文が不自然であっても意味が理解できていれば許容される (鳥飼・河原、2013 p.102)。
- (11) 原文にある語に一对一で辞書の訳語を当てはめ文法書にそって着実に訳すこと (山岡、2001、p.30) 英文和訳はしばしば直訳とも言われる (柳瀬、2011)。
- (12) L2とは Second Language を意味し、第2言語のこと。ここでは英語を指している。
- (13) 産まれたばかりの女の子を、貧困ゆえに後に苦しむことがわかってるので、苦しまないように産まれた直後に殺めるという話、蚊が媒介するウイルスによって足の皮膚が象の皮膚のようになってしまい、歩行が困難となり最終的には足が壊死してしまう象皮病の話など、日本では想像すらできない日常に学生はショックを受けたようだ。講演視聴後の感想では「貧困や飢餓を理解していたつもりだが、無知であったことを思い知らされた。もっと知りたいと思った」との声が聞かれた。また藤田氏の「本当の貧困とはお金のないことではなく、教養のないことだ」という言葉から教育の大切さを学んだ。藤田氏はそれ故、教育里親を募集し、里子の教育費の支援を募っている。
- (14) 「ハイコンテクスト文化」と「ローコンテクスト文化」という概念は文化人類学者であるエドワード・T・ホール (1976) によって提唱された概念で、国や地域におけるコミュニケーションスタイルの特徴を表す。コミュニケーションの中で、言葉に重きを置く文化 (ローコンテクスト文化) か、言葉以外 (文脈、背景、脈略) の意味に重きを置く (ハイコンテクスト文化) かに分かれ、日本は最もハイコンテクスト型とされた。ちなみに日本の対極に位置するのはドイツ系スイス社会である。
- (15) 日本語の人称代名詞を翻訳する際の難しさは翻訳の専門家も悩ませる問題で、金原 (2005 : p.109) は英語の一人称はすべて 'I' であるのに対し、日本語では「ぼく、おれ、わたし、わたくし、あたい、自分、己れ、われ、わし、拙者、朕」と多岐に分かれ、しかもそれぞれが独自のニュアンスを持っている

ため 'I' 一つをどう訳すかで悩むと述べている。

文献

- Hall, T. E. (1976) *Beyond Culture*, Garden City, N.Y.: Anchor Press.
- Jakobson, R. (1959) *On linguistic aspects of translation*. In R.A. Brower (Ed.), *On Translation* (pp.232-239). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Smith, L.E. (1983) *English as an International Auxiliary Language in L.E. Smith (Ed): Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon Press.
- The Student Handbook* (学生便覧) 高崎商科大学短期大学部、2022.
- 伊東弥香「世界をジブンゴト化する授業デザインー SDGs と CLIL の融合」東海大学教育開発研究センター紀要 第4号 pp.15-37、2019.
- 金原瑞人『翻訳を学ぶ人のために』、安西徹雄他編、世界思想社、2005.
- 国際連合広報センター「SDGs ポスター17のアイコン日本語版」2018. (https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/sdgs_logo/) 2022年9月26日アクセス
- 染谷泰正「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」『外国語教育研究』3. pp.73-102、2010. <http://www.kansaiu.ac.jp/fl/publication/pdfdepartment/03/04someya.pdf> 2022年10月3日アクセス
- 辰巳明子「大学英語教育における翻訳指導に関する研究：一般英語授業での翻訳指導実践を事例として」『翻訳への招待』No.13 pp.67-82、2015. http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol13/No_13-004-Tatsumi.pdf 2022年9月10日アクセス
- 寺沢拓敬『「日本人と英語」の社会学』研究社、2015.
- 鳥飼玖美子『国際共通語としての英語』講談社、2011.
- 鳥飼玖美子・河原清志「外国語教育への応用①文法訳読と翻訳」鳥飼玖美子 (編著)『よくわかる翻訳通訳学』(pp.102-103) ミネルヴァ書房、2013.
- 中津燎子『なんで英語やるの?』午夢館、1974.
- 成毛 眞『日本人の9割に英語はいらない』祥伝社、2011.
- 仁科恭徳「大学で英語を学ぶ必要はあるのか」『英語教育』Vol.66 No.12 pp.22-21、2018.
- 平井麻美・藤倉愛美・大江ひろ子・西井寿里 編著『持続可能な開発のための教育 (ESD) の理論と実践』ミネルヴァ書房、2012.
- 平子義雄『翻訳の原理—異文化をどう訳すか』大修館、1999.
- 広田紀子『言葉は国境を越える』上智大学出版、2007.
- 文部科学省『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」、2003.
- 「持続可能な開発のための教育 (ESD) 推進の手引き」、2016. 改訂版2019. (https://www.mext.go.jp/content/20210528-mxt_koktougou01-100014715_1.pdf) 2022年9月26日アクセス.
- 「小学校学習指導要領解説外国語・外国語活動編」、2017.
- 「中学校学習指導要領解説外国語編」、2017. (https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/_icsFiles/afieldfile/2019/01/15/1402610_1.pdf)、2022年9月26日アクセス.
- 「教委135-1-2 平成29年3月31公示 新指導要領等における持続可能な社会づくりに関連する主な記載 (抜粋)」(<https://www.mext.go.jp/unesco/002/006/002/001/shiryo/attach/1388906.htm>) 2022年9月26日アクセス.

——— 「SDGs 実現に向けた文部科学省の取り組み」、2019.
(https://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/team/jisedai/pdf/jisedai09_02.pdf) 2022年9月26日アクセス.

参考メディア

Walker, J. (2009) *The World's English Mania* in TED Talks (https://www.ted.com/talks/jay_walker_the_world_s_english_mania)

2022年10月4日アクセス.

柳瀬陽介 「山岡洋一さん追悼シンポジウム報告、および「翻訳」「英文和訳」「英文解釈」の区別」『英語教育の哲学的探究2』2011-12-14

(http://yanaseyosuke.blogspot.com/2011/12/blog-post_736.html)
2022年10月3日アクセス.

「付録1」 学生が担当した里子の手紙の一例



